

下がり藤

さがりふじ／藤紋／垂り咲きの貴公子



はじめに



「切られても、また咲く。それだけのことだ。

……これから少し、君の家の紋の話をする。急ぐな。藤は、百年かけて咲く。」

第一・この紋のこと



「まず、名から。下がり藤。さがりふじ、と読む。花房が下を向いて垂れている、それだけの形だ。

藤は自分では立てない。ほかの木に絡んで、その木を伝って伸びていく。頼りないと笑う者もいるだろう。だが、絡んだ木より高いところまで届くのは、いつも藤のほうだ。

そして、切られても死なない。根が残っていれば、翌年にはまた咲く。百年生きる藤は、珍しくもない。——君の家が、いまも続いているのと、同じことだ。」

第二・どこから来たのか



「この紋を背負ったのは、藤原氏だ。藤原の“藤”。名に、そのまま入っている。

一族は枝分かれし、地方へ下り、土地の名を名字にした。近藤、遠藤、佐藤、加藤、伊藤、斎藤——“藤”の字を残した名字は、そのなごりだと言われている。」

第三・何を願って背負われたか



「花言葉を持ち出すつもりはない。あれは後の世のものだ。

昔の人がこの紋に託したのは、もっと素朴なことだ。——絶えないでくれ。家が続くこと。子が生まれること。焼かれても、負けても、また建て直せること。

藤はそれを、毎年、目に見える形でやってみせる木だった。粘り強さと、繁栄。そのふたつを、一枚の紋にした。」

第四・君の家のこと



「ここから先は、君に聞かねばならない。同じ苗字でも、家ごとに紋は違う。上がり藤なのか、下がり藤なのか。丸で囲うのか、囲わないのか。

覚えている限りのことを話してくれ。墓石の紋、紋付、蔵の戸、古い写真の隅。何でもいい。」

おわりに



「一つだけ、断っておく。私は、君の家の紋を言い当てる者ではない。

同じ苗字の家がいくつもあり、その一つひとつに、別の紋がある。私に言えるのは、もっとも近い候補と、その根拠までだ。……そこから先は、君の家の記憶が決める。」

たしかなこと／伝えられてきたこと

・たしかなこと — 藤紋は藤原氏に由来する紋の系統で、日本でもっとも使用者の多い紋種のひとつです。

・伝えられてきたこと — “藤”の字を含む名字が藤原氏の流れであるという説。家ごとの紋の違いに込められた意味。

・断定しないこと — 同じ苗字でも、家ごとに紋は異なります。本書は「あなたの家の紋はこれです」と断定するものではありません。